

2026 年 7 月 26 日（聖霊降臨後第 9 主日、A 年特定 12）

メッセージ

「神は小さなものの内に」

（マタイによる福音書13： 31-33, 44-52）

司祭ヨセフ太田信三

どんな大木も、元は小さな種です。ゴマ粒よりも小さなからし種であっても、時間をかけて大きな木に育ちます。神は、小さな種の中に、すでに大きな命の可能性を託しておられます。ここに神の御心、神の計らいを感じます。神は私たちの目には小さく、力なく見えるものにこそ心を留められ、力を注ぎ込まれるのです。今日のみ言葉の最後には、終末の時のダイナミックな神の力が表されています。その大きな力が、小さな種に凝縮されて込められている、そのようなイメージです。小さなものにこそ神の御心が注がれているからこそ、私たちは小さなものを通して神を知ることができます。

これはすごい話だと思います。天国はどこか遠くにあるのではなく、この世界のからし種やパン種ほどの小さなものを通して表される、ということだからです。思い返してみると、福音はベツレヘムという「小さな町」で生まれた「幼子」によって語られ、天の国はたった五つのパンと二匹の魚によって表されました。それゆえに、主イエスはいつも「小さなもの」を指し示し、私たちの視線を「小」へと向けさせます。空の鳥、野の花に集中するならば、私たちの目は開かれます。そして、その開かれた目と耳でこの世界に生きるなら、「あなたがたは、天の国の秘密を知ることができる」と主イエスは言われます。「点」ほどのものを見つめることから、天の国が開かれます。

主イエスはさらに別の箇所で、「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であった」と言われています。小さなものに目を向け、忠実であることを求めているのです。一方で、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に気をつけなさい」と言われるように、小さなものに躓きが隠されていることもあります。小さなつぶやき一つに惑わされ、隣人へ不信感を抱いたり、神を見失ったりすることもあります。ちょっとした一言が潮目を変えることは、私たちの日常でよくあることです。主イエスは弟子たちに、「目を覚ましていなさい」と繰り返し伝えます。主イエスに従うということは、「目を覚ましている」ことなのです。小さな存在にこそ、主イエスは共におられ、神の御心は注がれているからです。

また主イエスは弟子たちを、「自分の倉から新しい物と古い物を取り出す一家の主人」にたとえられました。私たちも、受け継いできたみ言葉（古い物）を大切にしながら、日々出会う小さなもの（新しい物）の中に、神の恵みを新しく見いだすよう招かれています。そして、そこで見いだしたものを互いに分かち合うのです。主イエスの声を聞き続け、「小さなもの」への眼差しを失うことなく、互いに祈り合い、励まし合いながら、歩んで行くことができますように。